

伊吹がルシファアに呼ばれ書斎の階段を下りると暖炉の前に置かれたソファアに腰かけルシファアは何かを飲みながらクラシックを聞いていた。

「伊吹、これ覚えてるか？」

「ああ。この間アクゾンで買ったんだ。」

さらっと何事もなくルシファアの目の前にはデモナスと並んでゴールドヘルファアイイモリ・シロップの瓶が置かれていた。伊吹の脳裏には魔界に戻った早々ゴールドヘルファアイイモリ・シロップの騒動に巻き込まれ、襲われるかもしれない危機を感じながら兄弟全員に命令して効果を解いて行った苦い記憶が蘇り、伊吹は内心警戒しながら隣にあるソファアに腰かけた。

「デモナスで割って飲んでる。こうするとなかなかの美味さだ。」

「お前も飲んでみるか？美味いぞ？」

「どうした？飲まないのか？」

「もう出ている。効果は……？」

「一度飲んで耐性がついているからさほどでもない。」

「しかし今は、人間であるお前にこのゴールドヘルファアイイモリ・シロップを飲ませたらどうなるのか？と言う方に興味がある。」

「……え？」

「ゴールドヘルファアイイモリ・シロップには『人間に飲ませてはいけない』という事は一切書いていない。」

支配者の目になって、伊吹の顔を見ると、すでに彼の目はいつでも狩れる獲物を目の前にしてあえて狩らずに反応を見て楽しむ傲慢な支配者の目になっていた。

伊吹はルシファアにその目を向けられるといつも胸が苦しくなり、自分の心の一番大事な部分をつかまれたような気がしていた。

感情だっただけだが、伊吹はそれになんか愛し、愛され支配されていると感じることに悦びを見出してしまった女の感情だ。少しの間を置くと満足げに微笑み、話している最中に作っていたゴールドヘルファアイイモリ・シロップとデモナスのカクテルが入ったグラスを伊吹の前に置いた。

「飲んでみる。俺はお前がこれを飲んでどうなるのかが見てみたい。」

「……あ。」

伊吹は自分でも不思議なほどすんなりと目の前のグラスを手に取るとまるで吸い込むかのように一気に飲み干した。ルシファアはテーブルに置かれた空のグラスを見るとソファアにもたれかかり満足げに微笑んだ。

その顔は自分の優位性を自覚した支配者の顔であり、伊吹は心がわしづかみにされたような気分になっていた。

「ルシファアは怪しい。今からお前にどんな命令をしてもらおうか。……？」

顔を横に向けるとルシファアの満足げな笑みが見えた。

（……あの……）

「伊吹はソファアにもたれかかったままくると体をルシファアの方に向けると太ももをもじもじとこすり合わせた。

「……うん。……」

「なんだ？返事が聞こえないな。」

「ルシファアはあえて伊吹の返事が聞こえなかったふりをすると言葉を続けた。

「それに、お前の方からやっつけて欲しいことを言われないと俺が飲んだ分の効果が消えないぞ？」

伊吹が性行為を望む気持ちをはつきりと言うことにためらっているとルシファアはゴールドヘルファイアイモリ・シロップをグラスに軽く注ぎクイツと一口飲んだ。

上半身は前のめりになり伊吹に向けられたその顔は明らかに女が恥ずかしがる姿を見て楽しむサデイストの顔だった。

「どうして欲しい？言わないと分からないぞ？」

胸の苦しみがのどにせり上がり気がついたら伊吹は大きな声を発していた。

「ルシファアは顔を満足げな笑みで形にしたままわずかに口角を上げた。

「そしてソファアは顔を大きくもたれかかると手の草で伊吹にこちらに来るよう指示した。

「まずは俺のこれを勃起させる。命令を聞くのはそれからだ。」